

短 報



障がい者スポーツと理学療法士の関わりについて ～障がい者バドミントン大会でのアンケート調査を実施して～ *

江濱 崇

【要 旨】

2020年東京オリンピック、パラリンピック競技大会が開催されるが、障がい者スポーツについての理学療法士の関与は十分でないのが現状と思われた。そこで、パラバドミントン大会に参加している方を対象に理学療法士に対するニーズについて、アンケート調査を実施した。

調査をしたパラバドミントン大会に参加している方は下肢障がい者が主で、経験年数も幅がある。また理学療法士と関わった場面は病院が多く、実際のチーム活動や大会に参加する理学療法士は少ない。また、理学療法士に期待することとして、ストレッチアドバイスや大会時のコンディショニング調整があるため直接的に活動へ参加する必要があると考えられた。

キーワード：障がい者スポーツ，ニーズ，理学療法活動

はじめに

2020年東京オリンピック、パラリンピック競技大会に向け、準備が進む中、理学療法士（以下PT）の活動も活発となってきた。パラリンピック競技については、スポーツを通し障がい者の社会参加ができ、自立支援にもつながるため、幅広い活動が現在も期待されているが、PTとして競技への支援活動や障がい者スポーツとの関わりは十分ではない¹⁾。また、パラリンピックの正式種目は22競技ある中、PTへの期待と責務は大きいことが言われている²⁾。

そこで、私自身がPTとして活動しているパラバドミントンチーム主催の大会に、参加された方へPTの関わり状況と期待する活動についてアンケートを聴取したので報告する。

目的・方法

目的は、2017年9月に愛知県障害者スポーツセンターで開催の第29回東海障害者バドミントン選手権大会へ参加した障がい者を対象に、身体的基本状況・参加目的・PTの関与状況を調査し、ニーズを把握することである。

方法は、アンケート聴取を個別に実施し、①基本情報（パラバドミントンの経験年数、障がい部位）②参加目的③PTとの関わりの有無とその場面④障がい者スポーツでPTに期待すること、の4項目とした。

結果

本大会は、年1回開催されており、全国各地より参加されている。大会参加の障がい者数は35名で、個別に聞き取りできた回収数は27名（男性17名、女性10名、回収率77.1%）で年齢は20代3名、30代9名、40代9名、50代1名、60代5名と幅広い年齢層が参加されていた。

パラバドミントン歴に関しては、1年未満3名、2年以内3名、3年以内4名、10年以内5名、11年以上が12名と3年以上の経験年数が多かった（図1）。

障がい部位に関しては、上肢障がい1名、下肢

* The relationship between sports for people with disabilities and physical therapists
～ Conducted a survey at the badminton tournament for people with disabilities ～

リハビリネクスト株式会社
(〒471-0064 愛知県豊田市梅坪町6丁目14-18)
Takashi Ehama, PT: Rehabilnext Co., Ltd

E-mail: takashiehama.rehanext@gmail.com

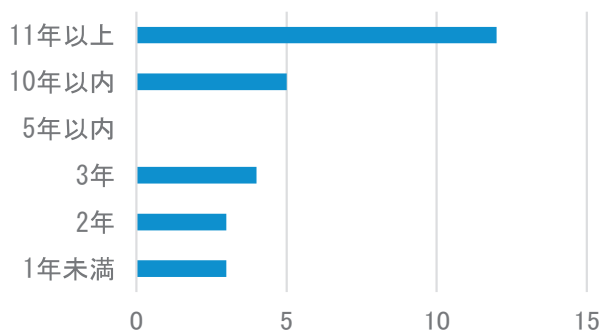


図1. パラバドミントン歴

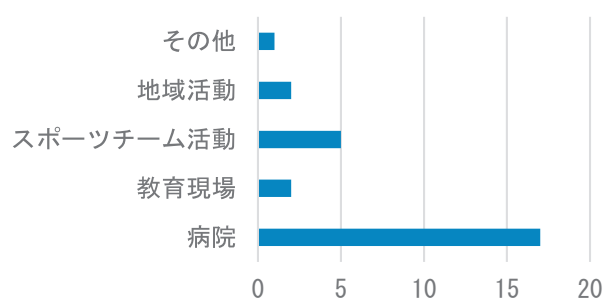


図4. PTに関わった場面 (複数回答)

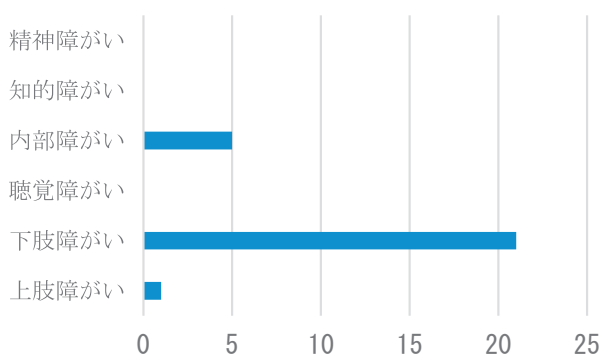


図2. 障がいの部位

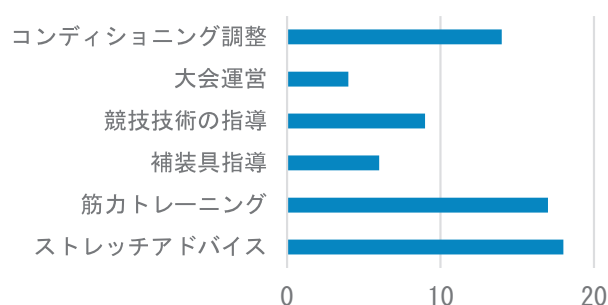


図5. PTに期待する活動 (複数回答)

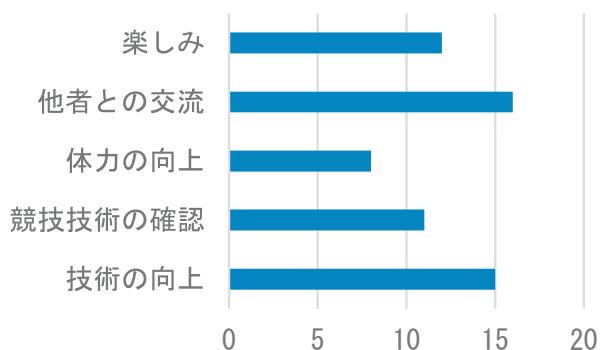


図3. 大会参加目的 (複数回答)

障がい 21 名、内部障がい 5 名、であり下肢障がいが主であった (図 2)。

大会の参加目的 (複数回答) として、技術の向上 15 名、競技技術の確認 11 名、体力の向上 8 名、他者との交流 16 名、楽しみ 12 名であった (図 3)。

PT と関わった場面があるかという問いに関しては、20 名がありと回答した。内訳として、病院 17 名、教育現場 2 名、スポーツチーム活動 5 名、地域活動 2 名、その他 1 名であった (図 4)。

障がい者スポーツで PT に期待すること (複数回答) として、ストレッチアドバイス 18 名、筋力

トレーニング 17 名、補装具の指導 6 名、競技技術の指導 9 名、大会の運営 4 名、大会時のコンディショニング調整 14 名という状況であり、その他、自由回答の中に、けがをした時の対処法やけがをしないための助言をしてほしいという回答があった (図 5)。

考察

参加者の特徴として、下肢障がいが多く、車いす使用で行う WH1・2 クラスから立位で行う SL3・4 クラスが中心であった。また、バドミントン経験も豊富であり技術力も高い。

大会参加の目的として、技術力の向上や状況確認などパラバドミントン能力を把握する場合や全国の仲間との交流や余暇の楽しみなど社会参加まで多岐にわたっていた。

参加者の 7 割が PT と関わりがある中、関わった主な場面が病院内でのリハビリであり、実際のパラバドミントンの場面でかかわった場合は少ない。しかし、PT に期待していることが実際のスポーツ活動場面で必要なストレッチ方法や大会時のコンディショニング調整、競技技術の指導を希望している場合が多く、病院内だけでなく障がい者スポーツ現場での活動を行うニーズがあると考えられた。

私自身が、本大会にかかわった際、ラケットを持つ利き手の肘関節の痛みについて相談を何回か受けた。その際、テーピング等のコンディショニング調整に加えフォームや車椅子等の操作方法などを希望されるため、適切な知識と経験が必要であることを痛切に感じた。また障がい者の方々と話すなかで、会場によっては更衣室やトイレ設備などのハード面の問題も指摘されることがあり、環境調整を行う大会運営そのものにもPTが参加する意味はあると思われた。今回の調査と私自身の経験から、障がい者スポーツチームや実際の活動場面への積極的に参加をすることで、PTが果たす障がい者スポーツの役割が見えてくるのではないかと思われた。

終わりに

2020年東京オリンピック、パラリンピック競技大会に加え、また2026年にはアジア競技大会が名古屋市で実施される。今後も様々な大会が続けて行われていく中、障がい者のニーズにこたえることのできるPT活動は有用であり、経験や実績を積むなど実践的な継続した支援を行う必要がある分野であると考えた。

【文 献】

- 1) 杉山真理：東京オリンピック・パラリンピック競技大会にむけた理学療法士の取り組み. 理学療法-臨床・研究・教育. 2016; 23: 3-8.
- 2) 奥田邦晴：ボッチャで語るパラリンピックと理学療法. 理学療法学. 2018; 45: 12-15.